



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

早川橋梁

神奈川県足柄下郡

箱根湯本駅から箱根登山鉄道の下り線に乗る。次の駅の塔ノ沢を経てトンネルを抜けると、はるか眼下の早川を跨ぐ緑色の鉄橋に差し掛かる。「出山の鉄橋」の通称で箱根屈指の観光スポットとして親しまれる早川橋梁だ。現存する国内最古の鉄道橋として近代化産業遺産、更に登録有形文化財にも認定される貴重な現役の鉄道橋でもある。

完成は一九一七年。かつて天竜川に架かっていた東海道本線のトラス橋の英国製鋼材を転用し、約二年の歳月をかけて架橋された。橋長六一メートルの橋を深さ四三メートルの深い渓谷に架設するため、谷底から約一万本の丸太を組み上げて総木製の足場を構築、工事はその上で展開された。足場というより巨大な仮設構台だ。架橋を終えた翌日、足場を解体する段になったその日に暴風雨により早川が氾濫、足場がすべて流出する事態となった。それでも鉄橋本体に何ら影響はなく、橋はその姿を一夜にして現すことになったという。

早川橋梁を過ぎ更に登坂した車両はスイッチバックするため出山信号所で一息つく。車窓から早川橋梁を見下ろすことができた。当時としては技術的な課題も多く、土地買収や路線変更、第一次世界大戦に起因する鋼材不足など幾多の難題を克服して架けられた橋だ。一〇〇年以上前に、切り立ったこの谷で瓦解する高さ四〇メートル超の足場、怒涛に流出する一万本の丸太。忽然と現れた鋼製鉄道橋の雄姿。不謹慎ながらそのスペクタクルを夢想して土木のドラマに胸がざわついた。秋の紅葉シーズンには橋上から絶景を見渡せるよう渡河する際に減速、数秒間停車するという粋な計らいもある。その静かな時間のなかで錦秋の絶景を堪能しながら、大正期の土木の息遣いを感じることができる。



早川橋梁には斜材がX状に配置されたダブルワーレントラスが採用されている。斜材が交差するポイントを連結することにより橋の強度が増し、細い鋼材で構成することができる。一方でより多くの資材が必要となることから技術の進歩とともに大正期以降は減少した。